

ジャムの蓋に使用していた油紙

寄贈／小早川源海・川口洋子

小早川ハルコさんは、夫の死後、ジャム製造会社を引き継ぎ社長となった。大きな鉄釜で炊き上げたジャムの蓋に、この油紙を使っていた。

原爆により工場は全焼。ハルコさんも全身に大やけどを負って8月10日に亡くなった。亡くなる前、ハルコさんが自ら切って、後日子どもたちのもとに届いた髪の毛は、ジリジリと焦げていた。

11歳だった次男の源海さんは家族も家も失った戦後を、これら僅かな遺品を励みに懸命に生きた。



小早川さん一家 1938年頃

寄贈者(ハルコさんの娘)のお話から

「しっかり者で、『女侍』のような母でした。甘えさせてくれるような人ではありませんでしたが、末っ子だった私は母のあとをどこでもついて行っていました。

まだ7歳だった私に母の死の実感はなく、一年、また一年と年を重ねて母の死を実感し、高校生の頃初めて泣きました。」